

第四回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

ヘルマン・オームス 著『徳川イデオロギー』

(1990年10月15日 ペリかん社 刊)

ヘルマン・オームス Herman Ooms 1937年生まれ。ベルギー、メイセ出身。専攻は、日本史(江戸時代および奈良時代の思想史・社会史)。ノートルダム・ド・ラペ大学を卒業し、セント・ベルシュマン大学、東京大学にて各々修士号を取得。シカゴ大学で博士号を取得。カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史部門教授(受賞時)。現在は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校日本史教授。著作は、”Charismatic Bureaucrat: A Political Biography of Matsudaira Sadanobu, 1758-1829”『祖先崇拜のシンボリズム』、『徳川ビレッジ:近世村落における階級・身分・権力・法』(原著は英語)、“Imperial Politics and Symbolics in Ancient Japan: The Tenmu Dynasty 650-800”、共編に”Rethinking Confucianism: Past and Present in China, Japan, Korea, Vietnam”他がある。

受賞のことば

ベルギー人である私が日本研究の道に入ってからちょうど四七年になります。社会人類学的なテーマから宗教学、歴史学—特に政治史や思想史—、イデオロギー分析など様々な研究に取り組んできましたが、もっとも私の興味を引いたのは、日本文化に固有の価値観でした。江戸時代前期のイデオロギー構造を研究しながらも、常に頭のなかにあったのは、現代の日本人をよりよく理解し、日本の基礎をつくっているものは何なのだろうか、という問いへの答えを求めることでした。私が日本研究をはじめたころ、研究者の数はわずかでしたが、今ではロサンゼルスのカリフォルニア大学に日本研究所ができて、二十名の学者がいます。日本は単に国家として考えるべき対象ではなく、一つの文明の現象であり、多くの人々が検討しなくてはならない普遍的な価値をもつ対象になっています。日本史は日本人だけのものではないのです。ですから、今回の受賞はあとに続く日本研究への励ましでもあると思っています。

※授賞式の挨拶から構成。

《選考委員評》

勝部 真長

従来、徳川家康が幕府を開くにあたり、馬上天下を取ることはできても、馬上天下を治めることはできないとして、朱子学を採用して天下統治のイデオロギーとした、との解釈が当然のように通用していた。本書はこの俗説を破り、初期徳川政治思想は、そんな単純なものではなく、もっと複雑多様な構造のイデオロギーを形成していて、それは明治・大正・昭和にまで影響力を及ぼしたという。

すでに信長が安土城のなかに總見寺を造って自己を神格化しようとし、秀吉も豊国大明神として神格化されることによって、その政権の正統性を宗教的に裏付けることを試みた。これに習って、徳川政権は、朱子学だけでなく、神道も仏教その他の信仰も動員して、自己政権の正統性を被治者に説得しようとしたのである。家康のブレーンであった南光坊天海が、三代家光とはかつて、日光東照宮と上野寛永寺を建て、家康を東照大権現に祀りあげ、神君として尊崇されるように仕掛けた。ここに徳川イデオロギーの秘密がある。

徳川イデオロギーの形成に与かったのは、天海のほか、鈴木正三・藤原惺窩・林羅山・山崎闇斎である。荻生徂徠・山鹿素行・熊沢蕃山らはアウトサイダーである。

著書によれば「イデオロギーは別的手段を用いた戦争状態の継続であり」、「初期徳川イデオロギーは、戦闘者を有徳の統治者に変容させ、分割されていた新社会を、神聖な未分の全体として意味づけ、そして、被支配者である大衆から責任ある主体＝臣民を創出した。」

家光が上洛する時、三十一万の兵を率いたことで知られるように、徳川政権は大軍事政権であった。近代日本も軍事力をテコとしたが、「教育勅語」や「国体の本義」にみられるよ

うに、神道による宗教的意味づけを活用したところに、徳川イデオロギーとの関わりがあるといえよう。とにかく奥の深い本である。

湯浅 泰雄

このオームス氏の著作は、十七世紀に徳川幕藩体制が成立するまでの過程に見出される複雑で広汎な思想的諸問題について、ゆきとどいた深い考察をしている。

オームス氏の着眼の基礎には、思想の営みの背後に潜んでいる歴史の大きな動きを見る姿勢がある。歴史をこのような巨視的視野からみる姿勢は、ともすれば思想家の言説の細部にとらわれがちな研究にはみられないものである。氏はまず、林家中心の朱子学イデオロギーの崩壊から江戸時代の思想史を見る従来の（丸山真男氏以来の）通説に疑問を呈し、戦国から江戸初期にかけて武家権力が確立した歴史的過程の内実注目している。この時代は日本の歴史上始めて、権力と民衆が力によって衝突した時期であり、武家政権は暴力によって破壊した旧秩序や民衆の信奉する宗教的権威に代わるべき精神的権威を必要とした。イデオロギーの問題はここから生れた。オームス氏は、武家政権の歴史において鎌倉イデオロギーとか足利イデオロギーとよび得るようなものはなく、徳川幕府の時代になって始めてイデオロギー問題が生じたことに注目している。この見方は、戦国期を日本の民族史・文化史・思想史の最大の転換期とみる内藤湖南（及び近年の中世史家）以来の着眼とも通じるもので、オームス氏の歴史認識の背景には日本思想史をトータルにとらえるすぐれた視点が前提されている。

江戸初期の武家権力は信長・秀吉・家康らの権力者の神聖化によって精神的権威を確立する政策をとったので、その主要な手段は仏教と神道に求められた。朱子学を当初からの正統イデオロギーとみる従来の見解は林家のつくり出した伝説にすぎない。十七世紀の闇齋学派が初めてこの問題と取りくんだとみるオームス氏の見方は、歴史学的見地からみてもきわめて正鵠を得たものである。

オームス氏は更に、近年の解釈学や象徴的テキスト分析の方法に立って、闇齋の哲学にみられる神道と朱子学のブリコラージュ（組合せ作業）の細部について興味深い分析を示し、一見混沌としてみえる闇齋の叙述から、イデオロギー的理論構成の意味をあざやかにとり出してみせている。

儒教（特に朱子学）と神道の複雑な関係は江戸後期から国学を生み、幕末の尊王論やナショナリズムへと道をひらくものであるが、荻生徂徠を重視する従来の見方では、この過程は十分にとらえにくいところがある。オームス氏の仕事は、江戸の思想史をみるに当って、多くの問題を発見できる新しい視点を提示している。

著者は外国人であるが、日本の原典資料を十分に理解し、しかも日本人研究者がままおちりがちな細部にのみ向う弊におちいらず、トータルな視点とテキストの細かいよみのバランスを失なうことがない。受賞作としてこのようなすぐれた作品を得たことを喜ぶたい。

坂部 恵

ながらくハーバード大学で外交史を教え、かつてアメリカ歴史学会の会長もつとめた I 氏の直話によれば、現在アメリカ史の研究は質量ともに非アメリカ人の研究者が優位を占め、アメリカ人研究者たちは、内側から見えないみずからの国の姿を他国人たちからくり返し学ぶ関係になっているとのことである。日本史や日本思想研究においても行く行くはそのようになるべきであるし、またなつてほしいとわたくしは考えている。オームス氏の今回の研究はそうした未来を先取りする質の高さと、着想の新しさを十分にそなえているもののおもわれる。

現今欧米の構造主義や、解釈学・テキスト理論・象徴学など最新の達成を行きとどいた理解によってふまえ、多くはさり気なく方法として使いこなしながら、十七世紀を中心とした徳川イデオロギーの諸相を浮き彫りにして行く論述は、大変説得的かつ魅力的である。素材となる一次資料と方法論のフィルターとの関係が、透視可能な形で書かれているので、読者は自分のレンズに応じて偏差を修正しながら読むことができる。この開かれた学問性がわたくしにはとりわけ貴重なものとおもわれる。